

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤とし、  
ICTを活用して「問い」を生み出す単元・授業づくり

北海道：札幌市立幌西小学校 校長 唐澤 俊樹

## 1. はじめに

北海道国語教育連盟では、研究主題である「言葉を通して、豊かな未来を創造する国語科の学び」のもとに、児童・生徒の主体的な学びを具現化すべく研究活動を進めている。

主体的に言葉に向き合う学びを実現するためには、交わされる言葉や目の前のテキスト等に対して受け身にならず、児童・生徒自身が絶えず問題意識をもって考えること、つまり言葉に対する「問い」をもつことが大切である。

この「問い」を単元・授業づくりという視点から捉える際に、その段階によって質的な相違点があると考えられる。例えば、学びの導入段階においては、児童・生徒自らが言葉の中から問題を発見し、課題を設定していくための「問い」がある。また、学習活動が展開される中では、他者との協働的な議論や目の前のテキストを通して生み出していく「問い」がある。この「問い」を通して、書き手や話し手の思いや考えを読み取る(聞き取る)理解力が育まれる。これら質的に異なる「問い」を児童・生徒が生み出していくために、教師はどのような働きかけを行っていくかという点が実践課題の一つである。

以上のことを踏まえ、「話すこと・聞くこと部会」において6年生の9月に実践した「みんなでも楽しく過ごすために（話すこと・聞くこと）」について紹介する。

## 2. 研究実践

【6年目的や条件に応じて計画的に話し合おう】『みんなでも楽しく過ごすために』（光村図書）

### 【本単元のねらい】

- 互いの立場や意図を明確にしながらか計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすることができる。
- 目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができる。

### (1) 単元の学習計画

時間	主な学習内容	使用 ICT 等
1	○学習の見通しをもつ。 「目的や条件に合わせて、計画的に話し合おう」 ・単元の学習マップを作成する。	ジャムボード
2	○二つのテーマについて、話し合いから計画実行までの進行計画を立てる。 ○二つのテーマについて自分の考えを明確にする。	ムーブノート
3	○話し合いの仕方を確認する。 ○話し合い（1回目）	動画撮影
4	○自分たちの話し合いについて振り返る。 ○教師のモデル動画を視聴し、話し合いに生かせそうなポイントを整理する。	動画再生
5	○二つ目のテーマについて確認する。 ○話し合い（2回目）	動画撮影
6	○本単元の振り返り ○2回の話し合い動画を見比べてできるようになったことを整理する。	動画視聴 ムーブノート

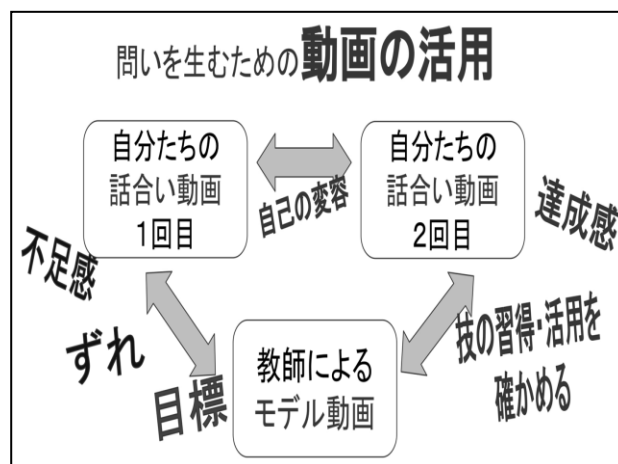
## (2) 「問い」を生むための手立て

○話すこと・聞くことの授業づくりでは「どんな話題を設定するか」によって授業の成否が決するとも言える。今回は学校生活を豊かにするためのアイデアを出し合い、それを実際に実行する計画を立てることを話題とすることにした。6年生として楽しい活動を生み出したいという思いと、そのために良い話し合いをしたいという思いが生まれることで子どもから「問い」が生まれやすい構造とした。

○一人一台端末を活用し、自分たちの話し合いの様子や動画に撮って、話し合いを客観的に見られるようにした。また、教師による話し合いのモデルを提示し、繰り返し見直すことができるようにすることで、自分たちの話し合いとの違いに意識が向くようにした。また、獲得すべき「話し合いのこつ」に目が向くようにした。

## (3) 授業の実際

### ①話し合う題材の工夫



#### 【題材①】1年生との交流会

条件：昼休み（15分）、班ごと（10人）、グラウンド

目的：1年生も6年生も楽しめるような遊びをする。

#### 【題材②】養護学校との交流会

条件：15分間、班ごと（10人）、養護学校の体育館

目的：養護学校の子どもたちがたくさん体を動かして楽しめる遊びをする。

ここでの大きなポイントは、一つ目に話し合っただけで実践できること。二つ目に1回目の話し合いを踏まえて2回目の話し合いに生かすことができることである。単元を通して子どもたちの課題意識が連続していくことが大切であると考えた。

実際に児童は二つの交流会にやりがいを感じて前向きに取り組み、活発な話し合い活動や交流会の準備など主体的に活動する姿が見られた。形だけの話し合いにさせない工夫が児童の実態とマッチしたといえる。

### ②自分たちの話し合いを動画撮影し何度も確認する

話し合い活動の弱点は再現性の低さである。今回の授業では、一人一台端末を活用して話し合いの動画撮影を行った。

1回目は「1年生との交流会」をどのように開くかについて、15分間で話し合いを行った。その際には、何のために行う交流会なのか、場所や時間などの条件は何かを明確にした上で話し合いを動画で撮影しながら行った。

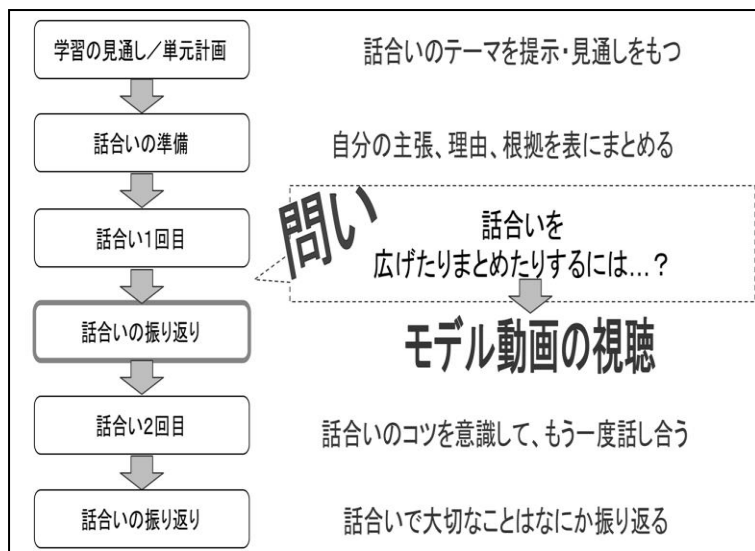
その後、実際に「1年生との交流会」を行い、交流会の振り返りを踏まえ、1回目の話し合いの振り返りを行った。交流会を開催する際の条件や目的に沿った話し合いであったかどうか、時間配分はどうだったかなどの視点で振り返りが行われたことが見て取れる。また、安易に多数決をして決めたために内容が深まらなかったことへの気付きも見られた。

#### 【自分たちの話し合いを振り返って】（子どもたちの振り返りから抜粋）

- ・仮の結論までは決められなかったけれど、質問がたくさんできて充実したから意見がまとまりやすくなった。条件や目的を考えて話し合うことができた。自分たちの班は15分では決められなかった。短いと感じた。
- ・少し時間が足りなかった。私は書記だったから、書記としての仕事はそれなりにできたと思うけど、全体的に質疑応答が下手だった気がする。

- ・仮の結論を決めるとき、多数決をしていた。
- ・二人とか三人で話している時があった。
- ・一人ずつの意見を聞いてから、質問でとても時間を使ってしまったので、仮の結論までいかなかったのが良くないところでした。でも、質問をたくさんしたので、自分の中でどの遊びにしようか決めるのは早くできました。

これを踏まえて、2回目の話し合い（「養護学校との交流会」について）に向かっていく過程で、もっと良い話し合いにしたいという願いが生まれ、どうしたら良い話し合いになるかという課題意識につながっていった。



2回目の話し合いにつなぐ場面を公開授業とした。教師のモデル動画を見ることで「まとめる話し合い」、「広げる話し合い」に焦点化し、子どもたちの「問い」を生み出す展開にした。

子どもたちの1回目の話し合いの振り返りから、「広げたり、まとめたりするには、どのような話し合いの仕方をすればよいだろう。」という課題を提示した。教師による話し合いのモデル動画の

提示により、さらに「問い」が具体化していった。

### ③教師の話し合いモデル動画から「話し合いのこつ」を見付け出す

本時の課題であり、本単元のねらいでもある「まとめる話し合い」、「広げる話し合い」について、教師のモデル動画を見ることで具体的な「話し合いのこつ」としてつかめるようにした。また、この動画を途中で止めて何度も見返すことで「こつ」が具体化していった。

子どもたちがどういう視点で動画を見ていたのかを注意深く見てみると、話し合い方に目が向いていたグループと内容に目が向いたグループがあった。全体での交流を通して（特に板書によって）各グループでの気づきを全体で共有し、「話し合いのこ



つ」を言語化し、自分たちの話し合いに生かせようだという見直しをもつことができた。

「広げる話し合い」については、集会の条件や目的に沿った質疑応答をすることが大切であることに着目していた。そして「まとめる話し合い」については、より条件や目的に合っているものを吟味することや問題点から完全策を導き出すことが重要であることに着目することができた。

これらの気づきから、自分たちの2回目の話し合いで気を付けることはなにかを具体的に計画することができた。

### 3. 実践を通して

今回は単元の4時間目を公開授業とし、授業後に協議を行った。その際に話し合われたことも含め、本単元の学習の成果と課題について以下のように整理する。

自分たちの話し合いを動画に撮ることで、話し合いのどの部分を工夫するとよいのかが明確となり、漠然となりがちな話し合うことのスキルを身に付けることにつながった。

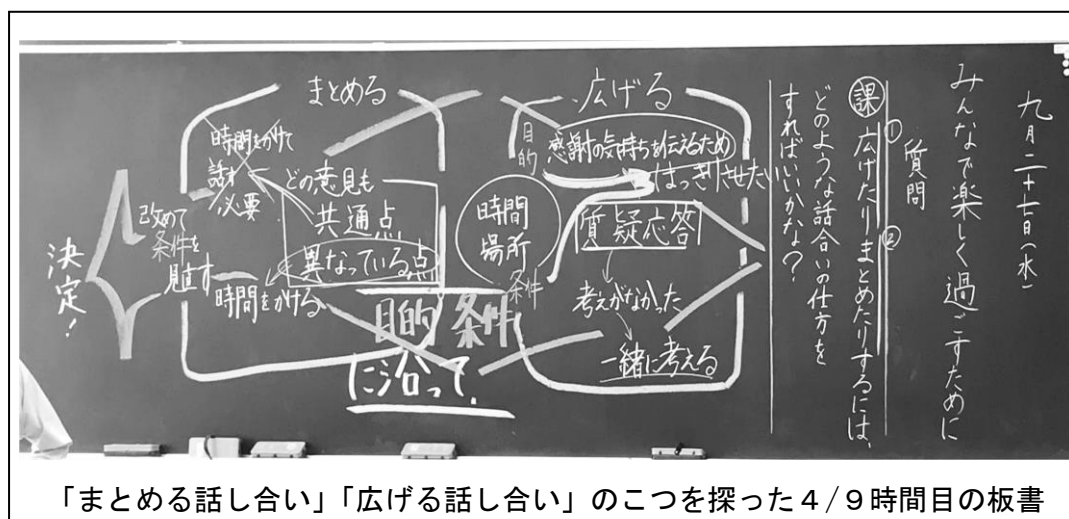
教師による話し合いのモデル動画を活用したことで、「話し合いのこつ」をつかむことができた。

協議では「広げる」と「まとめる」を同時に扱う必要があったかどうかについて話題となった。納得しながらまとめることの大切さを子どもたちがどれだけもっていたのかが課題意識につながる。「広げる」、「まとめる」とはどのようなことなのか、どのようなよさがあるのか「広げる」ことが質問なら、その流れはすでに進行計画にあるため、本当に本時で扱う必要があったのか、他のタイミングも考えられたのではないかということが挙げられた。

また、ただ質問するだけではだめだということに気付かせることで、目的や条件を踏まえた質問の中身について考えることにつながるのではないかと。質問の中身に目を向けている子もいたはずなので、そういった子の考えを丁寧に拾っていくことで、条件・目的に自然と目を向けていくのではないかとという反省も出された。

個々の課題意識がどうだったのかを見とっていくために、点数をつける、ベストポイントを見付けるなどの活動から見とることができるよう具体的に計画しておくことが重要である。

話すこと・聞くことの授業は年間を通じてそれほど多くはない。国語科で行う授業を他教科や他領域の学習とつなげるなどの工夫によって話し合いの実践数を確保していくことが大切である。また、話し合いの学習で身に付けたスキルを目で見分けるように残しておく（学級に掲示したりする）などの工夫をするなどして、子どもたちに確かな話し合いの力を育んでいきたい。



【授業実践】 札幌市立星置東小学校 教諭 鈴木 修治